

ほっかいどう N I E 通信

Newspaper in Education



発行 北海道 N I E 推進協議会

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内 ☎011-210-5802 FAX 011-210-5826

北海道 N I E 研究大会

道南地区で初開催

高井教諭(函館)が公開授業

教師らでつくる北海道 N I E 研究会(会長・豊島義明札幌市立定山溪中学校長)は道南地区初となる第18回研究大会・函館大会を9月11日、函館市立赤川中(蓮本裕一校長)で開いた。主題は「生きる力をはぐくむ N I E」。札幌や渡島管内の小中学校教諭ら計45人が参加、同校の高井太郎教諭(28)による道徳の公開授業などを通して、学校でのさらなる新聞活用策を話し合った。(関連記事は2面に)

同研究会は、児童生徒の「生きる力」や情報活用能力の育成などを目的に新聞活用と普及を研究している教諭たちの全道組織。北海道・新聞教育研究会を発展的に解消し、2005年に再スタートを切っている。大会は第12回 N I E 函

館・渡島セミナー(道 N I E 推進協議会主催)を兼ねて開かれ、豊島会長が「新聞紙上には日々さまざまな記事があふれている。校種や教科を超えて新聞を活用し、生きる力、多面的なものの見方ができる子を育てる授業のあり方を学んでほしい」とあいさつした。

メインの公開授業「生命のはぐくみ」は同校2年C組(36人)で行った。担任の高井教諭が使った記事は、北海道新聞夕刊の「まど姉と生きる」(2011年5月10日)。25歳で亡くなった姉を思い、悲嘆にくれながらも「姉のような病気に苦しむ人を助けたい」

学習指導要領が新しくなり言語活動の充実が声高に叫ばれるようになった。新聞を活用した学校での N I E の有効性は誰もが認めるところであるが「広がり感」が持てないのはなぜか。アドバイザーとして1年半、活動した。道内外の多くの優れた実践者との交流を通じ、N I E を「もっと広めたい」「もっと知ってもらいたい」と、痛切に思うようになった。その手だてとしてひらめいたのが道教育大旭川校での N I E 講座だった。教師を目指す学生たちが、新聞を使った授業実践例を学んだり、スク

りや深まりにつながるはずだと、考えたのだ。元アドバイザーの菊池安吉・旭川中学校長や、坂井誠亮・道教育大学旭川校准



ラップ作りのノウハウを身に付けたりする機会があれば、その経験を将来学校現場で必ず生かすことができ、N I E のさらなる広が

な姿を目の当たりにし心の底から「やってよかった」と思ったものだった。講座は10月18日に「新聞記事を使った授業作り」を行い、12月6日開催の N I E 旭川セミナーに学生たち

N I E の普及と有効性

旭川市立春光台中教頭 福澤 秀

が参加して締めくくる。もちろん、来年度以降も旭教大の協力を得ながら継続していこうと考えている。未来への種まきは、学生たちばかりではない。私が

一方で、眠っている実践の掘り起こしに、もっと力を入れたいと思っている。先日、旭川市社会科学研究所、中学校部会の先生たちにあらためて新聞の活用について聞いたところ、個人レベルではあるがしっかりと実践されているのが分かった。心強い限りである。N I E 活動を、年間指導計画の中に上手に位置づけることができれば、多くの先生方に還元できるはずだ。未来を担う若い力の成長に期待しつつ、アドバイザーとして、今後も微力ながら N I E 推進に携わっていこうと考えている。



教え子と一緒に公開授業に臨む高井・赤川中教諭

と、将来看護師になることを決めた妹の心の動きを紹介した内容。姉の墓前で「私、お姉ちゃんの分まで生きるから」と誓うシーンで締めくくっている。高井教諭が「みんな一人で生きているの?」と水を向けると、生徒から「家族

「友だち」という声が上がった。その上で、「自分たちは亡くなった人ともつながることができる」と問いかけ、生命をいとおしみ、人は支え合って生きていることを考えさせた後、「実はあなたたちも誰かを支えている。ほくだつてあなたたちに支えられている」と話し、授業を終えた。意見交流で、同研究会副会長の上村尚生・札幌市立稲穂小学校長が「生徒に対する質問が多すぎるくらいはあったが、(授業の)構成、公開授業を講評した。」とまた、渡島教育局の大井結厘子指導主事は「道徳の教材として即時的な新聞記事は扱いづらいが、じっくり記事を選び、上手に新聞を教材に活用した」などと指摘した。

4地区でNIEセミナー

当協議会主催の地区セミナーが8月から9月にかけ稚内、北広島、北見、函館の4市で開かれ、NIEに取り組み教諭たちが公開授業や新聞を活用した実践発表などを行った。

切り抜き教室 表現力高める

●稚内

する方法を話し合った。実践発表者は富磯小(稚内市)の高橋正一教諭、稚内中の国広尚人教諭、豊富高の土永和代教諭の3人。



このうち、新聞づくりの指導に当たっている高橋教諭は「(新聞をつくる過程が)共同学習の場になり、子どもたち同士のプロキシを高める大きな役割を果たしている」と述べた。

特徴を伝えて かべ新聞作り

●北広島

約50人が参加した第2回北広島・石狩セミナーは8月7日、石狩教育研修センター(北広島市)で開かれた。



この日は札幌市立北九条

小の佐藤元昭教諭と北広島市立大曲中の会田恵美教諭も実践発表を行った。

「当地記事で 地域にも関心

●北見

第11回北見・オホーツクセミナーは9月6日、北見市立大正小で開かれ、約40人の参加者を前に同校3年1組の担任羽山修斗教諭が公開授業に臨んだ。写真

ご当地グルメ「オホーツク北見塩やきそば」を紹介した北海道新聞の記事が教材。「ものをつくる仕事」の社会科の単元にちなんで、



羽山教諭が地元でとれる特産品や農産物の生産量などを子どもたちに教えた。このほか網走市立中央小の熊谷恭子教諭、同市立第二中の武井翔教諭、興部高の朝妻秀教諭が実践発表を行った。

NIE実践奮闘記

山田 耕平



私の勤務する天売小中学校は、全校児童生徒15人というへき地校だ。日本海に浮かぶ天売島に立地していることから、交通も海上のみに制限されるなどの理由で、新聞の定期購読自体が難しい環境下にある。

そんななか本校では、自らの考えを豊かに表現する「天売っ子」を育てる一環で、小中連携を生かした言語の教育活動を実践、その一つとして取り組んでいるのが「新聞作成」なのである。確かに、地域事情から

羽幌町立天売中教諭

進んで考え学ぶ力」を育むことは可能であると考えている。現在、小学校高学年では「わたしとほくの小学

タイムリーな新聞記事を活用した教育活動は難しい。しかし、行事や学習のまとめの際に取り組む新聞作成を通じ、「自ら

「豊かに表現する力」育む

を養っている。また、中学校では総合的な学習の時間を活用し、1年生から「職業調べ」などを題材にした新聞形式のリポート作りを行い、3年生になると、

生新聞グランプリ(北海道新聞社主催)の応募を目的に、「海鳥新聞」や「天売の漁師新聞」など身近なテーマを題材にした新聞作成に当たること

事後学習では、この経験を生かしたかべ新聞を作成。記事の内容がひと目でわかるような見出し作りのほか、読み手に自分たちの意図を分かりやすく伝えるため5W1H

修学旅行の取り組み全般をかべ新聞にまとめて発表する活動を行っている。本年度は、より新聞を身近にさせようと、修学旅行において道新本社を見学。同社の方から見出しの付け方や新聞の読み方など、新聞の基本をわかりやすく丁寧に教えていただいた。

のうち特に「1日」を意識した記事を書かせるなどした。生徒たちは、今までに見られないほど生き生きとした表情で、読み手を意識した記事を作成、思考力・表現力を育む、とても素晴らしい機会となったと思っている。

天売島は新聞を身近な存在として感じることが難しい環境にあるものの、小中連携によるこうした活動を通じ、「自分の考えを進んで表現する子どもたち」を養っている。これからの新聞作りを一つの手だてとして、自ら進んで考え学ぶ「天売っ子」を育てていきたい。

新聞を活用し 子どもにも意欲

●函館

第12回函館・渡島セミナー兼第18回道NIE研究会は9月11日、函館市立赤川中で開催。公開授業の後、北斗市立上磯小の石井望教諭、函館市立大川中の富久尾崇教諭、函館水産高の山本かおり教諭がそれぞれ、実践発表を行った。これの中で富久尾教諭は、①社会に関心を持つ②思考力を育てる③表現力をつけるの三つに重点を置いて授業に新聞を取り入れていく。「考えや価値観の変化を記述し、表現するための教材として新聞を使っているが、子どもたちも意欲的に取り組んでいる」とまとめた。

読者の投稿欄教材に

道徳 バツタから「命」を学ぶ

バツタを捕まえてはしゃぐ小学生の男の子。その男の子に捕まえられ虫かごで飼われているバツタ。立場が180度違う両者の気持ちを児童に考えさせ、命の大切さを教える道徳の授業が9月25日、札幌市中央区の盤溪小(古里和雄校長)で行われた。3年生20人の担任、近井祐介教諭(35)が北海道新聞の投稿欄「読者の声」を教材に、どの生き物にも命があることを考えようねーと、語りかけた。

(葛西信雄・北海道新聞NIE推進センター委員)

札幌・盤溪小

旭川市内の主婦(44)が書いた「バツタに学んだ生き物の尊い命」を使った。小学生の息子がバツタ8匹を捕まえ虫かごで飼っていた。息子にとっては上手に描けた絵と同じ成果物、「自分の思うようにしていないなどという傲慢な心を起こすのはもつてのほか」に、戸外にバツタを放させるまでの親子のやりとりを紹介。「虫かごのバツタが私

に『どうする?』と問いかけているような1週間だった」とまとめている。

授業では、この記事を実物投影機で読ませた後、児童2人に網を持った男の子とバツタの役を即興で演じさせた。近井教諭が「みんなだつたら放すの、そのまま飼っているの」と水を向けると、「6匹を放して、雄と雌1匹ずつを残す。子孫ができるからずっとバツタが飼える」というユニークな答えも。

5人に意見を述べさせた近井教諭は、用意した道徳ワークシートを全員に配布した。「男の子の気持ち」「バツタの気持ち」、さらに意見のまとめに当たる「ふりかえり」という三つの枠で構成され、それぞれ、児童が考えを記述できるスペースを確保したワークシート。

児童の書いた内容はさまざまで、**児童が記述するワークシートを確認する近井教諭**



「せつかくとつたんだ。はなしたくない」「バツタはかわいそうだけど大切に育てて、ずっといっしょにいよう」「8匹もいるから少しにがそうかな」。

「バツタ」では、「こんなせまい虫かごの中に1週間もとじこめるなんてひどい」「家族や友だちに会いたいよ」「子孫もつけれない

実践教諭と連携を拡大

北海道・東北アドバイザー会議

NIE活動の推進策などを話し合う第3回北海道・東北ブロックNIEアドバイザー会議が9月21日、岩手県一関市内のホテルで開かれたII写真II。

主題は「NIE普及のためにネットワークをどう広げるか」。道内の柳谷直明・平岸小校長(赤平市)、福澤秀・春光台中教頭(旭川市)、志田淳哉・札幌南高教諭を

含むアドバイザー8人と新聞協会、各道県の推進協議会関係者ら合わせて21人が参加した。

で、死んじゃうかもしれない。双方の気持ちを自分なりに意識した子どもたちは「ふりかえり」で、「バツタをとつた時は、とつてもうれしいけど、今度からはすぐににがしてあげたい」「バツタも命がけて生きていますんだ」と思った」などと書き込んだ。

この日の授業では、ものを相手の立場になつて考えることの大切さ、尊い命がすべての生き物にあるということを教えたかった」とし、「男の子とバツタの関係を通じ、子どもたちそれぞれが心の中で葛藤してくれたのが大きな収穫だった。自分の考えを自分なりにまとめるには、この葛藤が大事な要素だと思っ



一関

数が少なくすむ『はがき新聞』としてまとめている」と話した。

各地の現状報告では、柳谷校長が教科書で新聞についての記事が大幅に増えた点にふれ、「これまで行ってきたNIE授業のコンテ

ンツを映像などで一覧化する必要がある。新しい実践者が増えればネットワークも広がる」と提言した。

福澤教頭は「いまだに周りの教員から『NIEって何さ』と聞かれ、NIEの知名度不足を痛感している」とした上で、「教育行政を巻き込み、現場の教師がNIEに取り組める環境をつくるのが大切」と述べた。

志田教諭は同僚教諭たちに「授業の導入部や朝のホームルームで、『きょうの新聞』に関する話をしてくれるよう呼びかけている」と報告した。

東北の出席者からは「指定校を終えた実践者たちが活躍できるシステムを模索している(秋田)」「実践教員が講師となる出前講座をしている(宮城)などのケースが紹介された。

成功体験 継続の原点

たいまつは 君たちに

<中>

—アドバイザーの試み—

生きた教材 授業に手ごたえ

NIE講座で、新聞の活用方法について質問する道教育大旭川校の学生



元NIEアドバイザーの菊池安吉さん(56)は旭川市立旭川中学校長。忘れることのできない「成功体験」がある。最寄りの駅から24キロ、へき地3級の釧路管内標茶町の上御卒別小中学校(2005年3月閉校)に赴任し

た33年前のことだ。道教育大旭川校を終えたばかりだったが、いきなり小学3・4年の複式学級担任と中学の社会科を任された。「はてさてどうやって教えようか…」生活必需品さえ手に入り

の絆を取りもってくれた。教師冥利に尽きます」。菊池さんの目が潤んだ。世の中の「今」がそのまま届けられる、文章がまともって読んで読みやすい、プロが撮るから写真も出色

にくい地域だったが新聞だけは毎日欠かさず届いた。「よし、これを子どもたちとのコミュニケーションを図る道具にしてみよう」。なぜかそう思ったという。担任学級は全部で4人。日直の子に新聞を渡し一番気に入った記事とその感想を発表させた。「小学中学年では記事を十分にしゃべることができないし習っていない漢字も多い。その都度、ほかの記事を解説した」。中学の社会科はバリエーションが一つに広がる。選挙報道なら「争点が日本の抱える問題に直結。選挙や民主主義の仕組みを教える重要な教材になった」。同校には4年間、在籍した。菊池さんは「発達段階に応じた指導ノウハウが蓄積できた」と話すが、何よりの収穫は今でも連絡を取り合う教え子が多いことだ。事故で脊髄を損傷。釧路市内の車いすバスケットチームの選手兼監督として40代後半の男性とは必ず年に1回会って近況を語り合う。「新聞が教え子と

編集後記

○…秋の訪れとともに高校生インターシップの受け入れが始まった。北海道新聞社にやってくるのは17歳前後。昔風に言うとセブンティーン世代なのだが、若者らしいはにかんだ表情に接したりしていると、豊浜トンネル崩落事故が脳裏をよぎる、ことがある。

○…事故は1996年2月、後志管内古平町で起きた。断崖の巨大な真盤が剥離するように崩落、その真下を走っていた路線バスと乗用車を押しつぶし、20人の命を一瞬にして奪った。5人の高校2年生も犠牲になった。

○…ついつい「同じ年頃だよな」と思ってしまうのだ。生きていたら彼ら彼女らは30代半ばの働き盛り。さぞや子育てにも追われていたことだろう。案外、平せがあるのではないか。「仕事を見つけ家庭を持って!」。未来あるセブンティーンたちを前に、このおじさんは、たわいのないことを考えているのだった。(葛)

返す刀で「自分の中で自信として残っている授業があるんです」と、新聞を存分に活用し切った体験を打ち明ける。美瑛中(上川管内美瑛町)に勤務していた1997年のことだ。当時、同校は上川教育研修センターの研究指定校になっていて、福澤さんが社会科の授業公開を任された。消費

税率が3%から5%に引き上げられる直前のころ。「各社がいろんな角度から特集記事を掲載しており、すぐに『これを使おう!』と考えた」。図書館で関連記事を探し、その中から教材として使える記事を絞り込んで使った。まず3年生全員(4クラス約140人)に、選んだ記事数本をじっくり読ませ、その上で、「立論」「質問」「反発」で構成するディベートを取り入れることにした。生徒には必ず反対と賛成、ジャッジの立場から意見を述べさせるように工夫。そのために各クラスとも計10時間ほど「練習」に充てた。本番の公開授業では残り10分間で生徒に感想を話させた。一人が「税金は国民と世の間にある天秤のようなもの」と答えた。福澤さんは心の中で両拳を握り締めた。「最高の授業ができた」(葛西信雄)

◇「道内高校新聞ナウ」は休みます。

問い合わせは同協議会事務局 ☎011・210・5802へ。

。現アドバイザーの福澤秀さん(49)は旭川市立春光台中教頭が「教材としての新聞の長所は?」の質問に、一気に答えた。

当協議会は、インターネットの登録制交流サイト「フェイスブック(FB)」に公式ページを開設した。NIE活動に関する情報発信が狙いで、7月に運用を始めた。

釧路市を皮切りに道内各地で開かれているNIE地区セミナーや、7月の第18回NIE全国大会静岡大会(日本新聞協会主催)などの記事を掲載している。「教育に新聞を北海道NIE推進協議会」で検索できる。

お知らせ
フェイスブック
公式ページ開設
道NIE推進協